

時評

小説

弱者の「語り」 現実と格闘

松本 常彦

う可能性が残され、何が付託され得るであろうか。

宮本誠一「烙印」(「詩と

真実」719号)は、開店の

準備をいっしょにしてきた幸

平と可南子の二人から廃屋に

追いやられたと思っっている

「俺」の日常を独白体で描い

た小説である。

こう書くと物語めくが、物

語を期待する読者には、スト

レスや不満が残るであろう。

「俺」が廃屋にいる理由、廃

屋の毒虫は何なのか、人間や

動物がマネキンとして現れる

のはなぜか、などなど、疑問

は次々に生じるのに、その解

消は図られないからである。

幸平が兄で、可南子が母、廃

屋は病院めいた施設であると判明するが、現実の輪郭は最後まで曖昧である。

説明不足と評されても仕方

ないが、この小説は、説明に

よって現実を片づける思考と

は正反対の場所を目指してい

る。伝統的な小説が、精神的

疾患を抱えた「俺」のような

存在を、表現すべき対象とし

て扱うとすれば、この小説は、

「俺」の側から世界を語るた

めの主体として登場させてい

る。その語りが現実の輪郭を

欠いた夢に似るのは、それこ

そが「俺」の世界の現実だか

らである。

小説としての成否はともか

く、病者や弱者として対象化

されてきた存在を、語る主体として再構築する試みは、小説が現実と格闘するための一つのあり方を示唆する。

水木怜「夏の残り」(「第

二回北九州文学協会文学賞受賞作品集」)は、内容が短篇

では荷が重い印象がある。舟

越節「霊視の刻」(第七期「九

州文学」5号)は、オカルト

めいた内容ながら、主人公の

僧の存在感が、現実離れを防

いでいる。天谷千香子「雲の

ベッド」(「季刊午前」40号)

は、独り暮らしの老後を過ご

す嘘つき女の生き方をやわら

かく肯定する人間観が伝わ

る。

追記を一つ。前回の時評で、山下瀧子氏のお名前を誤った。お詫びして訂正する。

(九州大学大学院比較社会

文化研究院教授)

半世紀も前に江藤淳は「短篇小説の衰頹」を唱えた。文壇や雑誌文学とともに成長した短篇は、それを支えた読者の減少で文学的生命を失い形骸化していると見た江藤は、その事態を、むしろ歓迎すると述べた。日本の社会の大転換期に文学が更新されるためには、巨大で混沌とした現実との格闘が不可欠で、それになじまない短篇は退場すべきと考えたからである。

巨大で混沌とした現実感が、いよいよ強く広く世界を覆う現在、短篇には、どうい